

「長野県スクールデザイン（通称NSD）」は、学校づくりを起点としていますが、そのスコープは広く、教育、地域、そして私たちの未来に広がるものです。こうした事業に関われることを光栄に思いながらも、その趣旨を貫徹するための責任は重大であると感じております。以下に、NSD 審査委員会 赤松佳珠子委員長の考え（以下1～5）に加え、本事業に対する私の考えをまとめさせていただきました。ご一読の上、ぜひ、力をお貸しいただければと考える次第です。

1 未来にむけた人づくり

21世紀の世界が、危機的な状況にあることは言うまでもありません。このような中では、困難の中に可能性を見出し、信頼を紡いでそれを実現する「人」が、何よりも重要な資産です。NSDの基軸は、現代社会の課題を解決し、人々の幸せを広げていく状況を教育から切り拓いていくことにあります。

2 統合の起点としての建築

現代社会の問題のひとつに、専門・細分化することで統合が取りにくくなっていることがあります。情報空間におけるバーチャルな統合は、様々な可能性を拓いてくれています。身体を介したリアリティとの乖離が問題となり、新たな社会問題を生み出してもいます。NSDは、「学校づくり」を中心に据えながら、教師、地域、行政、生徒、専門家など多くの方々幅広く参加することで、地域や社会、教育など様々な課題を共有し議論のきっかけとなることを目指されています。

3 統合の調整者としての建築家

NSDが基本計画から関わる設計者を求めるのは、こうしたスコープを持っているからです。建築家が調整者としてプロセスに関わることで、ここに挙げた大きな目的の一端が開かれるはずだと考えています。

4 学びの深化を促す環境づくり

もちろん本プロジェクトの中心は「新しい学び」のための空間づくりです。この「新しい学び」のポイントは、子どもたちが主体的に学ぶことです。でも、主体的に振舞うことをどうやって伝えられるのでしょうか。私たちが空間づくりから始めようとするポイントはそこにあります。多くの研究成果が教えてくれているように、子どもたちが自分で学ぼうとするときに、安心して自らの可能性を試すことができる場が確保されていることが極めて大切なのです。

5 なぜ長野なのか

こうした大それたことは教育資源に恵まれた大都会でやるべきだ、という声も聞こえてきそうですが、本当にそうでしょうか。豊かな自然を持った長野は、人間と自然の距離が極めて近い環境です。それは厳しくも美しく、そして人知を超えて多様です。こうした自然から、子どもたちが日々、多くを学ぶことはもちろん、教育に携わる先生方や地域の人たちがそれらを活用して子どもたちに届けていく。長野県はこうした可能性に満ちていると私たちは信じています。

6 寿台養護学校施設整備事業への願い

特別支援学校における、施設の老朽化・児童生徒数の増加に伴う狭隘化、特別支援学校に通う児童生徒の障がいの重度・重複化、多様化といった課題は喫緊の課題であり、一人ひとりの可能性が最大限伸びる学びの場、共生社会の実現に向けた協働の学びの場を、特別支援学校に関わる全ての人々で創造したいと考えています。

特に寿台養護学校では、必要な諸室を備えた校舎を既存校舎との接続に配慮しながら増築し、校庭等の屋外活動場所を確保するという内外に渡った学びの場の充実を図ります。敷地内を東西に通り抜けできる通路がなく、送迎等の利便性に課題があります。寿台養護学校の敷地は、扇状地の扇頂部にあり、傾斜地を段丘状に造成しており、今後も擁壁等の対策やこうした場所の特性を有効活用する新たなデザインが求められます。課題は多く、難度の高い設計が求められますが、「私たちの教育、地域、そして未来を拓く学校づくり」というNSDの理念にご賛同いただき、本事業に多くの皆様のご協力を賜りますことを切に願います。